

黄表紙における拗長音の仮名表記

久保田 篤

一

無原則で混乱していると見られがちな江戸語の仮名表記に関して、屋名池（二〇一一）は「多表記性表記システム」であり「正確にヨミを伝えていた立派な表音表記」であるという卓識を示した。「ヨミが一つに定まりさえすれば、一つの語形に表記がいくつあってもかまわない」という原則は、近世の表記に広く当てはまる基本的なものであると見られ、その多表記性は近世表記の特徴である。「個人や個々の文献ごとの表記の個性・偏りは、このシステムが許す多表記性の中でどの表記を具体的に選択したかの結果にすぎ」ず「表面的な用字の個性・偏り」ではあるのだが、その上でなお、ある程度共通した偏りがあるのか、何故そうなりがちなのか等について、探りたいという思いが生じる。また、これまで探ってきた近世表記の実態には、表音表記システムであることを意識して見ると説明できることが少なからずあり、表音表記としての特徴も更に探りたいと感じる。

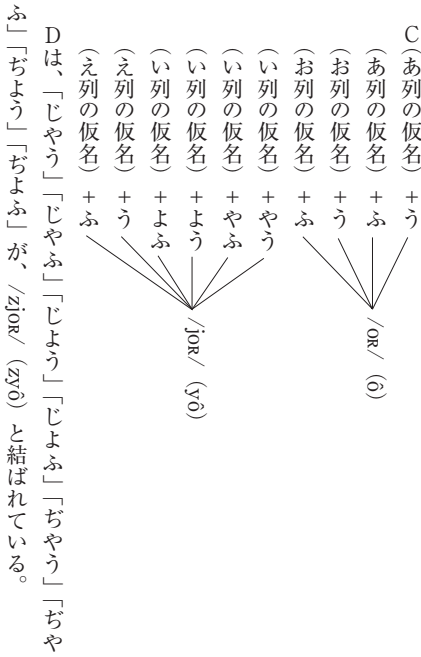
仮名の異表記と音形との対応関係を見ると、語頭のイ・エ・オや

ハ行転呼音・四つ仮名関連の場合は、一つの音形に対応する異表記の種類が2種で、語中尾イ・エ・オの場合は3種で済む。しかしオ列長音の場合は、開合の混同の問題も絡むので異表記の種類が多くなる。更にオ列拗長音になると、合音のほうにエ列+ウも加わるため、かなりの多表記となってしまう。そういう種類の多い表記の中からどれを選択するかというときに、全ての異表記が同様に用いられるのかあるいは幾つかの表記のみが選択されがちであるのか、偏りがあるとしたら選択されやすい表記が複数の文献で共通するののかという点などを探ってみたいのである。

今回は、漢字が非常に少なく殆どが平仮名という点から、仮名表記の考察にはまず取り上げるべき資料である黄表紙の作品を幾つか調査し、検討を行うことにしたい。黄表紙においては、他の資料にはなかなか無い、助詞「は」「へ」「を」の仮名「わ」「ゑ」「お」表記の例が、『八被般若角文字』の「道行にわ」（オ）、「身をなげんにわ」（三ウ）、『米饅頭始』の「扇やゑきたり」（ハオ）、『金々先生栄花夢』の「おごりおきわめまじやう」（一ウ）や「頭てん天口有」の「くわいぶん（回文）おぞまわしける」（三ウ）のように、時に見

られたりするなど、興味深い表記実態が窺われる。また、当時の他の資料には一般的に見られる振り仮名も、黄表紙には殆ど無いので、本行と振り仮名との違いを考える必要がなく、問題を複雑にせずに済む（今回の調査では漢字も比較的使用されることの多い序文の部分は対象としない。また幾つかの作品には振り仮名が僅かに見られることもあるが、今回は対象外とした）。

異表記の種類については、「江戸期の仮名の異表記を通覧すると、異表記が許されているといっても、その範囲は決して無限定ではないことに気が付く」として、屋名池（二〇一一）に次のようなまとめが示されている（イ・エ・オ及びハ行転呼音関係のAと四つ仮名のBは省き、オ列長音関係のC・Dのみ示す）。



このCの右側の /o/ のほうについて、まとめとしてはこのままですべて全く問題ないが、実際の様々な表記の例に、『金々先生栄花夢』「とをり(通) ける」(二ウ)、『見徳一炊夢』「もとのとをりに」(六ウ)・「芝るのとをり」(九ウ)・「もよほし(催)て」(九ウ)、『頭てん天口有』「かりもよほし(催)」(二ウ)、『八被般若角文字』「とおり(通) か、り」(二ウ)、『江戸生艶氣樺焼』「ちうもん(注文) どをり」(四オ)、『通町御江戸鼻筋』「おほせ(仰)」(五ウ)、『拜寿仁王参』「ねかひ(願) のとおり」(十ウ) など、「オ列の仮名+お・ほ・を」もあり得る（これらは /o/ かもしれないが、『従夫以来記』「をふせ(仰) られず」(七オ)、『八被般若角文字』「とふり(通) の人」(四オ)、『江戸生艶氣樺焼』「ひととふり」(一通り) (六ウ)・「のぞみのとふり」(十オ)・「ひとがとふる(通)」(十一オ)、『茶歌舞妓茶目傘』「とうり(通) やがれ」(三オ)、『悦鼠眞蝦夷押領』「きれども(斬) いれども(射) とうら(通) ず」(六ウ)、『拜寿仁王参』「きり(錐) のとふる(通)」(六ウ) などから /o/ の表記と見てもよいと考えられる）などがあることから、オ列長音の表記として、

- <ア列の仮名> 十う
- <ア列の仮名> 十ふ
- <オ列の仮名> 十う
- <オ列の仮名> 十ふ
- <オ列の仮名> 十お
- <オ列の仮名> 十ほ
- <オ列の仮名> 十を

という7種類があり得ることになる。⁽³⁾

このように拗長音でないオ列長音でもかなりの異表記が想定される。Cの左側のほうのオ列拗長音²⁰の場合、右側と同様に、

〈イ列の仮名〉 + やう

〈イ列の仮名〉 + やふ

〈イ列の仮名〉 + よう

〈イ列の仮名〉 + よふ

〈イ列の仮名〉 + よお

〈イ列の仮名〉 + よほ

〈イ列の仮名〉 + よを

〈エ列の仮名〉 + う

〈エ列の仮名〉 + ふ

という9種の表記があり得る。更にDの²¹になると、『頭てん天口有』に「ひやうせう」(評定) (一ウ・「なんでう」(何と言ふ)

(十四ウ) などがあることから、²² /ior/ には、

じやう・じやふ・じよう・じよふ・じよお・じよほ・じよを

ぜう・ぜふ

ちやう・ちやふ・ちよう・ちよふ・ちよお・ちよほ・ちよを

でう・でふ

など18種の表記があり得ることになる。

ところで、屋名池 (二〇一一) において各文献の用例として示されている同語形の異表記例のうち、オ列拗長音のものを取り出すと、『江戸生艶気権焼』の「ちやうちん (二例) / てうちん (一例)」・

「ふしやうち (二例) / ふせうち (二例)」「ゝませふ (二例) / ましやう (一例) / ませう (二例)」「ゝやせう (二例) / やしやう (一例)」、『浮世風呂』の「じやうだん (一例) / ぜうだん (一例)」「ちくせう (二例) / ちくしやう (一例)」「べうにん (二例) / びやうにん (一例)」などとなる。また、五例以上の用例のある安定した表記の例として挙げられているものうち、オ列拗長音の表記は、『金々先生栄花夢』の「ましやう (五例)」、『浮世風呂』の「ませう (六例)」などがある。

これらの例を見ると、「イ列の仮名」+ やう」と、「エ列の仮名」+ う」の、ほぼ2種類であることが窺える(右のなかではマシヨ一にのみ、「エ列の仮名」+ ふ)が見られる。但し、『遊子方言』の近い場所に同語形の異表記例が見られる例として「ゝませうか / ましよふか」(二ウ) が示されているので、(これもマシヨ一であるが)「イ列の仮名」+ よふ)が無いわけではないようである。しかし多くはないことが窺われ、特に(現代の感覚からは最もふさわしい表記と感じられる)「ゝよう」の見られない点が興味を引く。

この点に関して、鈴木 (二〇一六) に触れる部分がある。この総索引は、山東京伝『²³ 心学早染草』(寛政二年刊『²⁴ 大橋元心学早染草』が再版を重ね板木が磨滅したため葺屋重三郎が作者京伝に再刻用として依頼した京伝自筆稿本で、結局出版されなかった)という貴重な資料を対象としたもので、初版刊本とこの再刻用稿本の表記の違いが注目されるとして、仮名遣いの考察も行われている。その考察は、「歴史的仮名遣い表記と同じもの」「現代仮名遣い表記と同じも

の「歴史的仮名遣い」とも現代仮名遣いとも異なるもの」に分けて表記の例を幾つか示すというのが中心となつてゐるが、「なお、少し横道にそれるが、拗長音の場合を現代仮名遣いとは比べると」として、

(本文の仮名遣い)

ぎやうぎ

じやうるり

せいちやう

かいてう (開帳)

ちうぎ (忠義)

ちうう (中有)

しうさい (秀才)

(現代仮名遣い)

ぎようぎ

じようるり

せいちよう

かいちよう

ちゆうぎ

ちゆうう

しゆうさい

のように表記し、「—よう」「—ゆう」のように表記した例がない。という指摘がなされてゐる。

この「—よう」「—ゆう」が稀であるという特徴が、他の文献にも広く見られるとしたら、大変興味深いことである。キュー・シユー等の「ユー、キョー・シヨウ」等の「ョ」を、最も直接的に表すと思われる「—ゆう」「—よう」が用いられないのは何故なのかという疑問を抱く。そこで、オ列拗長音に加えウ列拗長音の表記も調査の対象とすることにす。ウ列拗長音の表記として想定されるのは、

〈イ列の仮名〉 + う

〈イ列の仮名〉 + ふ

〈イ列の仮名〉 + ゆう

〈イ列の仮名〉 + ゆふ

という4種類で、⁵⁾ /ziur/ も、

じう・じふ

じゆう・じゆふ

ちう・ぢふ

ちゆう・ぢゆふ

という8種類で、オ列拗長音ほどではないものの、想定される表記の種類がやはり多い。

二

まずはオ列拗長音の表記を示していくことにする(以下、濁音と考えられる箇所は、板本の濁点の有無にかかわらず濁点を付した仮名で示す)。なおジョー /jōr/ は、より多くの異表記があり得るので、一応それぞれの最後の部分にまとめて掲げておく。

最初はやはり、恋川春町作『金々先生栄花夢』(安永四年(一七七五)刊)を見る。この作品については、前節で、表記例のうちの一語を挙げたように、屋名池(二〇一一)で同語形の異表記例が示されている。また以前に久保田(一九九八)において仮名遣いの実態を簡単に示したこともあるが、オ列拗長音の表記に対象を絞り、改めて検討する。

この作品におけるオ列拗長音と考えられる用例は、

金びやうへ(金兵衛)(三ウ)(四オ)(四ウ)

びやうぶ(屏風) (三ウ)

しんしやう(身上) (四オ)

ちやうじ(長) (四ウ) (九オ)

ひやうく(五ウ)

けんぎやう(檢校) (六オ)

ぎやうに(仰) (八ウ)

きやうげん(狂言) (九ウ)

どうしやうが こうしやうが(サ変+助動詞ウ) (八オ)

などと、次の助動詞マス+ウの用例である。

きわめ(極) ましやう(二ウ)

ござりましやう(二ウ) (二オ)

だいじ(大事) にしましやう(四オ)

はやめ(早) ましやうぞ(九オ)

これらを見ると、全て「イ列の仮名」+「やう」(以下、「エイ」や「う」とする。他の、「エ列の仮名」+「う」等も、以下「エ」う」と示す)である。この作品では、1種類の表記しか用いていないようである。

次に、山東京伝作『米饅頭始』(安永九年(一七八〇)刊)を見る。『金々先生栄花夢』と同様に、やはり「エイ」やう」が多く、次の用例があった。

しやうでん(聖天) (二ウ) (二ウ) (六オ) (八ウ)

だいしやうくわんぎてん(大聖歡喜天) (十オ)

よしにしやうでんさま(「しよう」と「聖天) (二ウ)

つかわせましやう(助動詞マス+ウ) (二オ)

ござんしやう(ゴザンス+ウ) (四オ)

きりやう(器量) (四ウ)

ひやうばん(評判) (五オ) (九オ)

しやうばい(商売) (六ウ)

はんじやう(繫昌) (十オ)

また次の語は、右と同じ表記と異なる表記の2種類が見られた。

しやういん(承引) せぬゆへ(二ウ)

せういん(承引) せぬゆへ(三ウ)

このもう一つの「エ」う」の用例は次のものもあった。

てうちやく(打擲) (三オ)

更に、「エ」ふ」が一語あった。

けふ(今日) (四ウ)

このように、「エイ」やう」が中心で、「エ」う」「エ」ふ」が僅かにある。

市場通笑作『御代之御宝』(天明元年(一七八二)刊)も同様で、

びやうき(病氣) (二ウ) (二ウ)

しやう(性) (二オ)

しやうばい(商売) (二ウ)

ないしやう(内証) (四ウ)

しんしやう(身上) (六ウ)

しやうべん(小便) (十ウ)

きみやう(奇妙) (十二オ) (十三ウ)

きやうげん (狂言) (十三オ)
 むしやうに (無性) (十五オ)
 みやうが (冥加) (十五ウ)
 おふはんじやう (大繫昌) (三ウ)
 はちじやう (八丈) (十二ウ)
 など「(イ)やう」に、僅かに「(エ)う」と「(エ)ふ」がまじる。
 てうめん (帳面) (二ウ) (五ウ)
 いれ (入) やせふ (助動詞ヤス+ウ) (四ウ)
 山東京伝作『八被般若角文字』(天明五年(二七八五)刊)も、
 しやうぶ (勝負) (二ウ)
 いしやう (衣裳) (二オ) (五ウ)
 ひやうばん (評判) (二オ) (二ウ)
 むしやうに (無性) (二ウ)
 りやうづ (竜頭) (三オ)
 きやうげん (狂言) (三オ)
 きやうじや (行者) (三ウ) (四オ) (四ウ)
 しゆぎやう (修行) (四オ) (四ウ)
 むみやう (無明) (四オ)
 ひやうし (拍子) (四ウ)
 ちやうど (丁度) (五オ)
 きりやう (器量) (五ウ)
 しやうばい (商売) (五ウ)
 はんじやう (繫昌) (五ウ)

ちやうぶ (丈夫) (二オ)
 などやはり「(イ)やう」が殆どである。なお、ジョーには、右のよ
 うに「じやう」と「ちやう」が1例ずつあった。一方「(エ)う」は、
 てうあい (寵愛) (二オ)
 三てう (丁) (四オ) 五てう (丁) (五ウ)
 の3例のみで、「(エ)ふ」は無かった
 唐来参和作『通町御江戸鼻筋』(天明六年(二七八六)刊)も同
 様で、
 りやうかへ (両替) (二ウ)
 りやうしん (両親) (二オ)
 ひやうばん (評判) (二ウ) (九オ) (十五ウ) (十五ウ)
 びやうき (病氣) (三ウ)
 しやうでんぶし (正伝節) (七オ)
 ちやうづ (手水) (七オ)
 しやうばい (商売) (九ウ)
 きやう (京) (九ウ)
 こきやう (故郷) (十一オ)
 きやうげん (狂言) (十五オ)
 じやうるり (淨瑠璃) (七オ)
 どうじやうじ (道成寺) (十一ウ) (十二ウ)
 むじやう (無常) (十二ウ) (十二ウ)
 のようにやはり「(イ)やう」が多く、(イ)やうは全て「じやう」
 そうめう (総名) (二オ)

しせう(師匠)(六ウ)(六ウ)
 こせう(小姓)(十一ウ)(十二ウ)
 べうぶ(屏風)(十三ウ)
 という「(エ)う」もあるが少ない。またこれら2種類の表記が併用されている、

ふしやうち(不承知)(十四ウ) ふせうち(不承知)(七オ)
 むしやうに(無性)(七ウ) むせうに(無性)(九ウ)
 の2語があった。更にこの作品には「(エ)ふ」もあり、
 てふ(蝶)よはなよ(二オ)
 りてふぼう(人名)(二ウ)
 という2例が見られる。

恋川春町作『悦鼠肩蝦夷押領』(天明八年(二七八八)刊)も、
 やはり多いのは「(イ)やう」である。

きやうげん(狂言)(二ウ)(十オ)
 めいしやう(名将)(二ウ)
 くつきやう(屈強)(二オ)
 しやうぐわん(賞翫)(三ウ)
 みやう(妙)(三ウ)
 ひやうろう(兵糧)(五ウ)(五ウ)
 しやうゆ(醬油)(六オ)(六ウ)(七オ)
 ぐんびやう(軍兵)(六ウ)
 しやうばん(相伴)(六ウ)
 りやうち(領地)(八ウ)

ひやうばん(評判)(八ウ)
 ひやう(儀)(十ウ)(十二ウ)(十三ウ)(十五オ)
 なんりやう(南鏡)(十一ウ)
 しやうだい(招待)(十三ウ)(十四オ)
 らくじやう(落城)(八ウ)
 はんじやう(繫昌)(十一ウ)
 これに比べると「(エ)う」は少なく、用例は次のとおりである。

せうち(承知)(二ウ)(三オ)(十二オ)
 かんじんてう(勧進帳)(八オ)
 めうがしごく(冥加至極)(八ウ)
 べうべうたる(渺々)(十四ウ)
 しかるべう(助動詞ベシ)(二オ)
 ござりませう(九ウ)

以上のように、「(イ)やう」が多く、やや少ないが「(エ)う」もあり、「(エ)ふ」は僅かに見られるという、共通の傾向がある程度見られることが分かる。

これらの作品とはやや使用比率の傾向が異なるが、同じ2種類の表記が中心となっているものとして、朋誠堂喜三三作『見徳一炊夢』(安永十年(二七八二)刊)がある。この作品では、

ひやうし(拍子)(三ウ)
 いしやう(衣裳)(四ウ)
 びやうき(病氣)(四ウ)
 きりやう(器量)(四ウ)

きやうとい (氣疎) (六ウ)

しやうぞく (装束) (十オ)

りやうり (料理) (十二オ)

りやう人 (兩人) (十四ウ)

しゆぎやう (修行) (十四ウ)

という「(エイ)やう」とともに、

せうばい (商売) (五ウ)

せいてう (成長) (八ウ)

はいめう (俳名) (九オ)

せうだい (招待) (十一ウ)

てうめん (帳面) (十三オ)

などの「(エイ)う」のほか、助動詞マス+ウが、

上ませう (三ウ)

たべませう (六オ)

ござりませう (八ウ)

ふりわけませう (十三オ)

のように「(エイ)う」で書かれ、以上のように「(エイ)やう」と「(エイ)う」が同程度見られる。また、『米饅頭始』と同じく「今日」のみは「けふ」で、5例全てが「けふ」である。

けふの事 (四ウ)

けふは (十一ウ)

けふの仏 (十一ウ) (十一ウ)

けふきりで (十三ウ)

なお同一語形で異表記の見られるものとして「証拠」1語があったが、やはり「(エイ)やう」と「(エイ)う」である。

しやうこ (証拠) じや (十三オ)

せうこ (証拠) をだせ (十二ウ)

竹杖為軽作『従夫以来記』(天明四年(一七八四)刊)も右と同様に「(エイ)う」の比率が多い。「(エイ)やう」は、

いしやう (衣裳) (三ウ)

ひやうばん (評判) (十三オ)

かんじやう (勘定) (二オ)

うんじやう (運上) (十三ウ) (十三ウ)

であり、「(エイ)う」は、

仕りませう (マス+ウ) (二オ)

しんぜませう (ク) (六オ)

てうし丸 (銚子丸) (四オ)

てうちん (提灯) (四オ)

きめうてうらい (帰命頂来) (八オ)

せうれう (精霊) (八オ)

かいてう (開帳) (十二ウ)

などがある、「(エイ)う」のほうがやや多い。

唐来参和作『頼光邪魔入』(天明五年(一七八五)刊)も同様で、

りやうけん (了見) (二オ)

いちやう (一条) (二オ)

びやうき (病氣) (四ウ)

などの「(イ)やう」よりも、

くませう(二オ) 二ウ(二オ) 三ウ(四オ)

たせう(多少)(二オ)

らせう門(羅生門)(二ウ)

ぶせう(不精)(四オ)

などの「(エ)う」のほうが多い。

このように、黄表紙の幾つかを見ると、オ列拗長音の表記は、「(イ)やう」「(イ)やふ」「(イ)よう」「(イ)よふ」「(イ)よお」「(イ)よほ」「(イ)よを」「(エ)う」「(エ)ふ」の9種類が想定されるうちの、「(イ)やう」と「(エ)う」の2種類のみが一般的であり、「けふ」(今日)など一部の語に僅かに「(エ)ふ」が書かれることもあるという、共通の傾向が窺える。

三

山東京伝作『江戸生艶氣権焼』(天明五年(二七八五)刊)では、

しやうとく(生得)(二オ)

きしやう(起請)(二ウ)

ひやうばん(評判)(三オ) 四ウ)

白ひやうし(白拍子)(四オ)

きりやう(器量)(六オ)

しやうべんぐみ(小便組)(六オ)

すいきやう(酔狂)(七オ) 十一オ) 十五オ)

どうりやう(道了)(八ウ)

ちやうづ(手水)(九オ)

四百四びやう(病)(十オ)

しやうばい(商売)(十一オ)

きやうげん(狂言)(十二ウ) 十五オ)

ないしやう(内証)(十三オ)

しやうぞく(装束)(十四オ)

ちやうど(丁度)(十五ウ)

きやうくん(教訓)(十五ウ)

へんじやう(遍昭)(二ウ)

じやうるり(浄瑠璃)(十二ウ)

さんしよじようゆ(山椒醬油)(十四ウ)

すへはんじやう(末繫昌)(十五ウ)

などのように、「(イ)やう」が多く、

かいてう(開帳)(八ウ)

ふせう(不承)(十五ウ)

しかるべう(助動詞ベシ)(十オ)

という「(エ)う」が少しあるという点だが、前節に示したものと共通しているが、この作品では、屋名池(二〇一一)でも示されている同語形の異表記例が、オ列拗長音を含む語にも、

(不承知) ふしやうち(十一ウ) 十二ウ) ふせうち(六ウ)

(提灯) ちやうちん(八ウ) 九オ) てうちん(九オ)

(助動詞ヤス+ウ) 申やしやう(二ウ) しやせう(八オ)

(助動詞マス+ウ) あげましやう(十三ウ)

あげませう (十三オ)

ござりませふ (五オ)

かた付ませふ (十五ウ)

などがあり、助動詞マス+ウのマシヨーには「せふ」という「(エ)ふ」も見られるが、更に珍しい「(イ)よう」もある。

しようにち (承知) (三オ)

(なお、「なんぎ(難儀)をしよふかしれぬ」(四オ)という「(イ)よふ」の用例もあるが、この「しよふ」は、第五節において見るように、シヨーの可能性が高いか)

「(イ)よう」は前節で示した作品には無く、第一節でも触れたように用例はかなり少ないと見られるが、他の作品でも僅かであるが書かれることがある。

四方山人作『頭てん天口有』(天明四年(二七八四)刊)にも1例だけ、他表記と併用のものとしてある。

うぢのじやう(升)よく(「升億」の振り) (十三オ)

うぢのじようよく(十四ウ)

この例のほかは、前節の最後に示した幾つかの作品のように、

りやうり(料理)(一オ)(二オ)(八ウ)(九ウ)(十一ウ)

ひやうぜう(評定)(一ウ)

ひやうばん(評判)(十ウ)

ひやうろう(兵糧)(二ウ)

りやうこく(両国)(三ウ)

りやうにん(両人)(二ウ)

りやうぜん(両膳)(十五ウ)

くつきやう(屈強)(三ウ)(九ウ)

ゑつりやう(悦令)(九ウ)

ふりやうけん(不料簡)(九ウ)

ふりやうけん(不量軒)(九ウ)

きやうや(京屋)(十一オ)

きやうばし(京橋)(十一ウ)

なんりやう(南鐙)(十一ウ)

きやう(興)(十一ウ)

れんばんじやう(連判状)(五ウ)(五ウ)(五ウ)(六オ)

という「(イ)やう」と、

ほうてう(包丁)(二オ)(二ウ)(二ウ)(五ウ)(十一ウ)(十三ウ)

(十四ウ)

かりてう(借帳)(三オ)

てうめん(帳面)(八ウ)

てう(帳)(四ウ)

さかいてう(堺町)(三ウ)

よしてう(葭町)(七ウ)

たかさごてう(高砂町)(七ウ)

ほんてう(本町)(八オ)

にてうまち(二丁町)(七ウ)

二てうまち(二丁町)(七ウ)

そうせう(宗匠)(九ウ)

しせう(師匠)(十ウ)

りんへう(臨兵)(九ウ)

はくてう(白鳥)(十一オ)

かもんけう(掃部卿)(十一オ)

めうがや(茗荷屋)(十一ウ)

きめうてうらい(婦命頂礼)(十二オ)

めうにち(明日)(十三オ)

てうし(銚子)(十五ウ)

ひやうぜう(評定)(一ウ)

なんでうこと(何と言ふ)(十四ウ)

などの「(エ)う」とが、同じ程度の数で見られる。また、第一節にも示したが、右のとおり、ジョーには、他の作品には無かった「ぜう」と「でう」という表記があった。更に、マス+ウには、

つとめましやう(二ウ)

まされませう(二オ) あられませう(四ウ)

のように複数の表記があり、「今日」のみが、

けふ(今日)(四ウ)

と「(エ)ふ」であるというように、『江戸生艶気樺焼』と共通の特徴が見られた。

数少ない「(イ)よう」は、芝全交作『大悲千祿本』(天明五年(二七八五)刊)にも2語2例見られる。

によろば(女房)(二ウ)

かかりようか(書かれ+助動詞ヨウ)(四オ)

この作品でも、「(イ)やう」が、

そんりやう(損料)(二オ)(二オ)(二ウ)(三ウ)(五オ)

人ぎやう(人形)(二オ)

しやうもん(証文)(四オ)

りやうけん(料簡)(四オ)

しよじやう(書状)(四オ)(四オ)

というように最も多いのはあるが、次のように「(エ)う」も、

てう(帳)を付る(二ウ)

てうし(銚子)(三ウ)

せうし(笑止)(三ウ)

けうげん(狂言)(四ウ)

のようにある程度あり、「(イ)よう」がある以外は前節に示した傾向と同様である。

同じく芝全交の『茶歌舞妓茶目傘』(天明七年(二七八七)刊)

にも、「女房」が、

によろば(女房)(九オ)

というように同じ「(イ)よう」で書かれる1例がある。この「女房」には、

にやうほう(女房)(二オ)

という「(イ)やう」も1例あった(ボとボウという点は異なるが)。「(イ)よう」が1例ある点以外は、

りやうけん(料簡)(二ウ)

むしやうに(無性)(七オ)

りやうり (料理) (六オ)

ひやうしぎ (拍子木) (七オ)

ちやう (丈・情) (二オ)

じやう客 (上客) (三オ)

などの「へい」やう」と、

せうち (承知) (二ウ)

しせう (師匠) (二ウ)

内せう (内証) (二ウ)

ろくせう (緑青) (二ウ) (四オ)

てうづばち (手水鉢) (四ウ)

むせうに (無性) (五オ)

四でうはん (四疊半) (五ウ)

などのやや多い「へ」う」であり、助動詞マス+ウは、

あげませう (九ウ)

ござりませう (十ウ)

あたゝまりませふ (六オ)

のように、これまで見てきた作品の幾つかと同様、「へ」う」と
 「へ」ふ」の2種の異表記が見られた。

また同じ芝全交の『拜寿仁王参』(寛政元年(一七八九)刊)は、

りやう (竜) (三ウ)

きみやう (奇妙) (七ウ)

しやうこと (スル+ヨウ) (五オ)

ちびやう (持病) (五オ)

びやうなん (病難) (九ウ)

むしやうに (無性) (五ウ) (七ウ)

ひやうばん (評判) (六オ)

りやうじ (療治) (六オ) (六ウ) (七ウ) (九ウ) (十オ)

かふみやう (光明) (九オ)

ぶつみやう (仏名) (十ウ)

みやうほうれんげきやう (妙法蓮華経) (九ウ)

はんじやう (繫昌) (二ウ) (九ウ)

じやうど (浄土) (十ウ)

など「へい」やう」が多いなかに、

わがてう (朝) (二ウ)

てう人 (町人) (七ウ)

のように「へ」う」が少しあり、2種類の両方が見られる、

みやう (妙) だけれど (二ウ)

めう (妙) だの (五ウ)

がある等、「へ」う」の比率はそれぞれ異なるが、基本的にはこれ
 までと同じ傾向である。ただやはり1例だけ、

によふほう (女房) (七オ)

という、これまで見てきた作品には無かった「へい」よふ」(第一節
 で触れたように『遊子方言』には「ましよふ」があるようだが)が
 あった。右までに僅かな例を示した「へい」よう」も、

びやうにん (病人) (八オ)

という例が1例あり、「びやう」の「持病」「病難」と合わせて「病」

は2種の表記となる。更に、他の作品には無い「けやう」の用例がある。

みだけやう(弥陀経)のやふな(二ウ)

このような「エ」やう」もあり得た(今回の調査ではこの1例だけである)ことが分かる。

山東京伝作『仮手綱忠臣鞍』(寛政十三年(一九〇一)刊)にも「エイ」よう」「エイ」よふ」がある。基本的には他の作品と同様に、

いつしやう(一生)(二ウ)

ひやうれつ(氷裂)(二ウ)

ついしやう(追従)(五ウ)

ちやうらう(嘲弄)(五ウ)

りやうぢ(療治)(六ウ)

ちくしやうどう(畜生道)(六ウ)

りやうほう(両方)(八ウ)

しやうことなき(スル+ウ)(八ウ)

百りやう(画)(九ウ)

しやうぶかは(菖蒲革)(十ウ)

やんしやう(ヤンス+ウ)(十ウ)

ちやうほう(重宝)(十一ウ)

ひやうたん(瓢箪)(十一ウ)

きやうしや(香車)(十二ウ)

わがちやう(朝)(十三ウ)

四百四びやう(病)(十四ウ)

むしやうに(無性)(十五ウ)
じやうし(上使)(六ウ)

馬のじやう(馬之丞)(六ウ)

じやうじゆう(成就)(八ウ)

三じやうの豆(升)(十ウ)

三かう五じやう(三綱五常)(十五ウ)

はんじやう(繁昌)(十五ウ)

さりぢやう(去状)(十四ウ)

じんぢやう(尋常)(十五ウ)

などの「エイ」やう」と(このように、/zior/には「じやう」と

「ぢやう」が見られる)。

ぶせう(無精)(二ウ)

せうれう(精霊)(十二ウ)

せうこ(証拠)(十三ウ)

れうちく(了竹)(十四ウ)(十四ウ)

どせうほね(土性骨)(十四ウ)

せうばい(商売)(十四ウ)

一せう(一生)(十五ウ)

せうじ(障子)(十五ウ)

のように「エイ」やう」よりはやや少ない「エ」が中心である。更に「エ」ふ」が、

けふ(今日)(五ウ)

という『米饅頭始』『見徳一炊夢』等と同じ「今日」の1例と、

あてられふ(十一ウ)

というラレル+ウの1例に見られる。また2種類の表記がみられる語として、

ちやうちん(提灯)(七ウ)

てうちん(提灯)(十一オ)

があるほか、『江戸生艶気権』と同様に「助動詞マス+ウ」に幾つか異表記がある。

ましやう(九ウ)(九ウ)

ましよふ(八ウ)

ませう(八ウ)

このように一つ前に見た『拝寿仁王参』以外には見られなかった「(エイ)よふ」が1例あり、このマシヨウは二つの山東京伝作品を合わせると、「ましやう」「ましよふ」「ませう」「ませふ」の4種類が見られることになる。更に、「(エイ)よう」が、

にんぎよう(人形)(二ウ)

という1例のほか、「(エイ)やう」と併用の、

きようげん(狂言)(二ウ)

きやうげん(狂言)(十四オ)

としてある。以上この作品には、比較的珍しい「(エイ)よう」が2例、かなり稀な「(エイ)よふ」が1例あるということになる。

前節に挙げた作品においては、ジヨウ以外の「ior」は「(エイ)やう」と「(エ)う」で限られた語に僅かに「(エ)ふ」もあり、ジヨウ/iorは「じやう」が主で稀に「ちやう」があるという共

通の特徴を見ることができた。更にこの節に示した作品によって、「ior」には僅かに「(エイ)よう」が加わることのあること、マシヨウ等の限られた部分にのみ稀に「(エイ)よふ」「(エ)ふ」があること、「ior」にも稀に「ぜう」「でう」の見られることなど、やはり「(エイ)やう」と「(エ)う」が殆どではあるが、時に異なる表記の加わることがあるという表記実態が窺われる。

四

オ列拗長音に比べ、ウ列拗長音の表記は単純である。基本的には「(エイ)う」である。幾つかの作品におけるウ列拗長音の用例を示してみる(以下、オ列の場合と同じく、ジュー/juの例は後のほうにまとめて示す)。

『金々先生栄花夢』

しうぎ(祝儀)(四オ)(六オ)

しうぢう(主従)(四オ)

『米饅頭始』

ちうこう(中興)(九ウ)

さげぢう(提重)(四オ)(四ウ)(八ウ)

まんぢう(饅頭)(九オ)(九オ)(九オ)(九ウ)(十オ)

一家ぢう(中)(十オ)

『見徳一炊夢』

くわいちう(懷中)(四オ)

ちうごく(中国)(七オ)

きうくつ (窮屈) (八ウ)

りきう (利休) (十ウ)

きうたく (旧宅) (十一オ)

ふなまんぢう (船饅頭) (二ウ)

『御代之御宝』

ちうりう (中流) (二ウ)

ちう (中) (二オ)

かつちう (甲冑) (八ウ)

しう (衆) (十五オ)

このぢう (此中) (四オ)

『従夫以来記』

とちう (途中) (六オ)

でつちしう (丁稚衆) (七オ)

こんりう (建立) (八オ)

りう女 (竜女) (十二ウ)

きうとう (旧冬) (十四オ)

まんぢう (饅頭) (五ウ)

『江戸生艶気樺焼』

きう (灸) (二ウ)

こりう (古流) かゑんしう (遠州) (三ウ)

ちうもん (注文) (四オ) (六オ) (八ウ) (九ウ) (十二オ)

しんちう (真鍮) (八ウ)

きう (急) (九オ) (十オ)

御しうぎ (祝儀)

しんぢう (心中) (二ウ) (十一ウ) (十二ウ) (十三オ) (十三ウ)

(十三ウ) (十五オ)

このように、全て「ヘイ」であり、「ヘイ」ゆう」「ヘイ」ゆふ」が無いのみならず、「ヘイ」ふ」も無い。また、以上の作品ではジュージューが「ぢう」のみである点も共通している。

『通町御江戸鼻筋』も同じく「ヘイ」のみだが、1例だけジューに「じう」があった。

やちう (夜中) (二オ)

ときうさん (人名) (三ウ)

ちうしや (中車) (七ウ)

女ちう (女中) (七ウ) (八ウ)

おらんだりう (流) (十五ウ)

じうゆう五 (十有五) (二ウ)

一けぢう (一家中) (二ウ)

よしはらぢう (吉原中) (四ウ) (四ウ)

まんぢう (饅頭) (八ウ)

ぢうそ (住僧) (十二ウ)

『茶歌舞妓茶目傘』も、

いきう (伊久) (二ウ) (二オ) (二オ) (三オ) (七ウ) (七ウ) (九オ)

みきう (シ) (二ウ)

せんのりきう (千利休) (二ウ)

りうぎ (流儀) (四オ) (四ウ)

たりう (他流) (四オ)

しよりう (諸流) (五オ)

きうじ (給仕) (六ウ)

まんぢう (饅頭) (七オ) (十オ)

のように「(イ)う」ばかりだが、1例だけ、

ばからしふ (馬鹿) おつす (八オ)

という「(イ)ふ」があり、珍しい例である。同じ形容詞連用形ウ音便の用例がもう1例あって、「ふるふ(古) みへます」(四オ)とウ音便が「ふ」で書かれているので、この点が関係あるか。

右以外の作品のウ列拗長音の用例を簡単に掲げておく。やはり全て「(イ)う」である。

『頭てん天口有』

さるさぶしうや (秋夜) (二オ) (二ウ) (二ウ) (二ウ) (十四ウ)

いんちう (陰中) (二オ)

とうげつちう (当月中) (二オ)

にうきう (入給) (九ウ)

『大悲千祿本』

せいしう (勢州) (四ウ)

『八被般若角文字』なし

『頼光邪魔入』

こんりう (建立) (二オ) (二オ) (二ウ) (二ウ) (二ウ) (二ウ)

『悦鼠肩蝦夷押領』

おうしう (奥州) (二ウ)

よろしうござりませう (九ウ)

上しう (上州) (十一オ)

きうでん (宮殿) (十四オ)

しうぐ (主従) (四オ) (十三ウ) (十五ウ)

しうれん大王 (六オ) (七ウ) (八オ) (十四オ) (十四オ)

唯一、今回調査した作品の中では『仮多手綱忠臣鞍』にのみ、「(イ)ゆう」が見られる。この資料でもやはり基本的には、

ちうぎ (忠義) (二ウ) (十四ウ)

ふちう (不忠) (二ウ)

ちうしんぐら (忠臣蔵) (二ウ)

きう (急) (四ウ) (四ウ) (八オ)

とちう (途中) (五オ)

しうげん (祝言) (十一オ)

うつくしう (美) うまれついた (十一ウ)

でいちう (泥中) (十四ウ)

いつかちう (一家中) (七オ)

のように「(イ)う」であるが、2例だけ「(イ)ゆう」があった。

おしゆう (主) (七ウ)

じやうじゆう (成就) (八オ)

これらはかなり珍しい例であるが見られるが、オ列拗長音の場合の同じく稀な「(イ)よう(ふ)」の例として目立った「にようば(う)」(女房)も合わせると、漢字の音読みに、シユ・シユウ、ジュ・ジュウ、ニヨ・ニヨウの、それぞれに2種類あることが、稀

な「ゆ」「よ」の使用に関わると考えられる。ただ、今回の調査ではこの作品に見られただけなので、更なる追究は措き、稀に「エイゆう」もあつたという点を述べるにとどめておく。

ウ列拗長音の表記は、以上のように殆ど全てが「エイ」であつて、「エイゆう」はまず無いと言つてよいのであるが、「エイ+ゆう+う(ふ)」という文字連続の用例として次のようなものがある。

『見徳一炊夢』

ふじゆふ(不自由)にくらし(二オ)

ふじゆふ(不自由)な所(八ウ)

『頭てん天口有』

ふじゆふ(不自由)なり(十二ウ)

『江戸生艶気權焼』

此ふじゆう(不自由)なところが(六ウ)

『頼光邪魔入』

ちゆう(自由)にならず(四ウ)

『悦鼠貞蝦夷押領』

なにふじゆう(不自由)なく(十三ウ)

『拜寿仁王参』

じゆふ(自由)じざひ(七オ)

じゆふ(自由)になるよふにして(八ウ)

『仮手綱忠臣鞍』

ふじゆう(不自由)也(八オ)

このように、「自由」は「じゆう」「じゆふ」(一例「ちゆう」と書かれている。このことから、ジュー/じゆは「じう」「ちう」、ジユウ/じゆうは「じゆう」「じゆふ」という書き分けが行われていたと見られる。

すなわち、「ゆう」「ゆふ」という文字連鎖は、基本的には「ユー」表記の一部ではなく、「ユウ」表記として用いられているということになる。そこで、他の「ユウ」の表記も見ておきたい。

『金々先生栄華夢』

心ゆふにして(優)(二ウ)

ゆふかた(夕方)(二ウ)

『見徳一炊夢』

ゆふしよ(遊所)(三ウ)

ゆふ所(遊所)(八ウ)(九オ)

『頭てん天口有』

さゆふ(左右)(十一オ)

『頼光邪魔入』

へいゆう(平癒)(四ウ)

『通町御江戸鼻筋』

じうゆう五(十有五)(二ウ)

あさゆふ(朝夕)(九ウ)

『悦鼠貞蝦夷押領』

いふもん(幽霊)の滝(竜門の滝の振り)(四オ) いふ門のたき(四ウ)

ゆうれい(幽霊)(六ウ)

『拜寿仁王参』

六尺ゆうよ(有余) (二ウ)

さゆふ(左右) (六ウ)

これらのほか、「言う」ほどの作品でも全て「いふ」となっている。

以上のように、一つだけ「いう」「いふ」のある作品はあるが、他は全て「ゆう」「ゆふ」である。「ゆ」を用いた表記は「ユー」「ユ」の表記として用いられ、ユでないキユー・シユー・チューなどの「ユー」―「ユ」を書き表す場合には基本的には用いられないと言える。

五

前節で見たように、「ゆう」「ゆふ」はユーを優先的に表す表記で、そのため、キユー・シユー・チューなどの「ユー」の表記としては「エイ」ゆう(ゆふ)が避けられたと見られるが、オ列拗長音についても同様のことが考えられるのではないだろうか。すなわち、「よう」「よふ」はヨを優先的に表すため、キョー・ショー・チョーなどの「ョ」の表記としては「エイ」よう(よふ)が避けられたのではないかとということである。そこで、ョの表記の用例を見ることにしたい。

『金々先生栄華夢』には、

やうやく(漸) (三オ) (八ウ)

かよふに(斯様) (五オ)

というように、「やう」表記と「よふ」表記とが見られる。助動詞

ヨウには、次のようにこの両方がある。

す、はきに出よふ(三オ)

す、はきにや出やう(八オ) 出かけやう(六オ)

『従夫以来記』にはョの用例は少ないが、同じく「やう」と

「よふ」が見られる。助動詞ヨウダは、

わるひ(悪) やうでい、(良) やうで(十ウ)

もらつた(貰) やうな(十ウ) くそのやうな(十四オ)

と「やう」のみであるが、ほかの語には、

はちまき(鉢巻) にしやう(五オ) めんやう(面妖) (十四オ)

よふござります(六オ)

のように「やう」のほか「よふ」もある。「しやう」はショーの可能性もある。

『頭てん天口有』は、同じく2種類が見られるものの、「やう」と「よう」である。助動詞ヨウダであつても、

うかむ(浮) やうに(四ウ)

せがき(施餓鬼) のようで(十二ウ)

のように「やう」と「よう」1例ずつが見られる。このほかは、

やう(陽) (二オ) (二オ)

いかやうの(如何様) (二ウ)

やうく(漸) (九オ)

やうきう(楊弓) (十ウ)

かきおとすべきやう(様) はなし(十三ウ)

ようい(用意) (十三オ)

ようがいけんご(要害堅固)(十三ウ)

このように「やう」が多く、しかし「よう」もある。

『米饅頭始』も、「やう」と「よう」である。助動詞ヨウダは、

そのやうに(一オ)

そばやのやうで(九オ)

のように「やう」であるが、そのほかの語には、

やうす(様子)(四オ)

やうく(漸)(七オ)

という「やう」の用例と、

きようもの(器用者)(五ウ)

という「よう」の用例がある。

『八被般若角文字』にも、用例数は少ないが2種類の表記が見られるが、この作品では「やふ」と「よう」である。

くのやふなれども(二オ)

唐人がさ(傘)のやふだと(二ウ)

きようもの(器用者)(二オ)

以上は2種類の表記が見られるものだが、続いて3種類の表記が見いられている作品を挙げる。

『見徳一炊夢』には「やう」と「よう」と「よふ」の3種類が見られる。ヨウダはやはり、

此やうな(四ウ)(十二オ)

あなたさまのやうな(五ウ)

ゆめのさめたやうな(十四ウ)(十五オ)

このように「やう」であり、ほかの語には、

やうる(用意)(六オ)

きやうな(器用)(七ウ)

ようす(様子)(四ウ)

出よふか(助動詞ヨウ)(二ウ)

このように3種類のヨ一表記がなされている。

『大悲千祿本』も「やう」「よう」「よふ」の3種類であるが、この作品では「よふ」が最も多い。他の作品では「やう」が多い助動詞ヨウダも、

御て(手)のよふ也(二ウ)

たこのよふだ(三ウ)

このように2例とも「よふ」である。このほかは、

いりやう(入用)(二オ)

つうよう(通用)(四オ)

あついよふ(終助詞)(四オ)

よふじ(用事)(四オ)

「やう」1例、「よう」1例、「よふ」2例である。

『仮手綱忠臣鞍』も同じく「やう」「よう」「よふ」の3種類である。助動詞ヨウダはやはり、

馬のやうな(二ウ)

馬のせをわけるやうな(七ウ)

のりかけたやうな(十一オ)

此やうに(十一ウ)

ねりま大こんのやうに(十四ウ) ほか15例
 など「やう」が20例と多いが、

すゞ(鈴)のよふな(五ウ)
 せめるよふに(十五オ)

という「よふ」2例もあった。これ以外の語には、

ばつやう(末葉)(六オ)

ちまやうて(血迷)(十二オ)

かんよう(肝要)(二ウ)

ようかん(羊羹)(八ウ)

かよふて(通)(三ウ)

など「やう」2例、「よう」3例、「よふ」1例(動詞ウ音便)が見られる。

『御代之御宝』も3種類であるが、「やう」と「やふ」と「よふ」である。助動詞ヨウダであつても、

しまふ(仕舞)やうに(十二ウ)

もてるやうに(十三ウ)

このやうに(十三ウ)

たてる(立)やふに(五ウ)

見るやふ(十三オ) どのやふな(十五オ)

こまる(困)よふになり(六オ)

でた(出)よふにて(六オ)

このように3種類の表記が見られ、これ以外の語にも、

おはやうござります(早)(十三ウ)

さやふでござります(左様)(三オ)

いりやふ(入用)(六オ)

やふす(様子)(八オ)

よふす(様子)(七ウ)

よふく(と)(漸)(七オ)

よふこそおいでなされました(七ウ)

よふござります(七ウ)

たとゑんよふもなし(様)(十二オ)

このように3種類が見られる。

『江戸生艶気樺焼』も、右と同じく「やう」と「やふ」と「よふ」である。既に見てきたように「やう」が多い助動詞ヨウダは、

このやうな(二オ)

きこへる(聞)やうに(四オ)

め(目)にたつやうに(九オ)

このやうに(九オ)

みへ(見)のよいやうに(九ウ)

とばゑ(鳥羽絵)のやうな(十一オ)

いふ(言)やうな(十二ウ)

とやはり「やう」が多いが、

うぬ(汝)がやふな(九ウ)

おくりのやふに(十三ウ)

かく(書)よふに(二オ)

ほどけるよふに(九ウ)

ゆりるよふに(十ウ)

このように「やふ」2例と「よふ」3例も見られる。これ以外の語は、全て「よふ」である。

よふく(漸)(九ウ)(十オ)(十二ウ)

もよふ(模様)(十二オ)

すそもよふ(裾模様)(十四ウ)

ごきげんよふく(なされまし)(十三オ)

『通町御江戸鼻筋』も、「やう」「やふ」「よふ」である。助動詞ヨウダであっても、

たまのやうなる(二ウ)

みるやうな(八ウ)

ぬけるやふに(六オ)

どのよふに(三オ)

ほれられぬよふに(五オ)

ほれぬよふに(六オ)

くのよふだ(九オ)

というように3種類の表記が見られる。そのほかの語には、

おはやう(早) おざんすね(三ウ)

しよふ もよふ(仕様模様)(三オ)

よふく(漸)(五ウ)(六オ)(十一ウ)

さよふ(左様)(十二ウ)

のように「やう」1例と「よふ」6例があり、この両方の見られる、

ごむやう(御無用)(十三オ)

ごむよふ(御無用)(十二ウ)

もあった。

『悦鼠貞蝦夷押領』も同じく3種類だが、こちらは「やう」「や

ふ」「よう」である。助動詞ヨウダは、

かん中(寒中)のやうだ(五オ)

くさぞうしのやうに(十オ)

そん(損)なやうでも(十ウ)

こぶ(瘤)のやうでござります(十一オ)

詩をよむやう也(十一ウ)

すゝむ(涼)やうだ(十四ウ) ほか6例

など「やう」が多いが、「やふ」も、

こぶまき(昆布巻)のやふになり(七ウ)

みるやふだ(十オ)

の2例がある。助動詞ヨウは、

こしらへてこやう(二ウ)

そめさせやう(七ウ)

のんであげやう(八オ)

あぶらげを入やう(十四オ)

ねだんがすしだれやう(十五オ)

このやうに5例全てが「やう」であった。このほかは、

やうす(様子)(二ウ)

かやうに(斯様)(九オ)

やうい(用意)(二ウ)(二ウ)

ようがんびれい(容顔美麗)(七ウ)
かよふて(通)(十二オ)

のように、「やう」2例、「よう」3例、ウ音便の「よふ」1例である。

『茶歌舞妓茶日傘』になると更に増えて、「やう」「やふ」「よう」「よふ」4種類が見られる。助動詞ヨウダは、

おちぬ(落)やうに(二ウ)

ついたて(衝立)のやうな(三ウ)

はなみち(花道)のやうな(三ウ)

おさへた(押)やうな(八オ)

どま(土間)のやうな(九ウ)

さかい丁のやうに(十オ)

というようにやはり「やう」が6例で多いが、

そゝるやふで(三ウ)

人をばかにするやふな(五オ)

あんじた(案)やふだが(七ウ)

のように「やふ」も3例ある。これ以外の語は、

やうい(用意)(三ウ)(四オ)

さよう(左様)(十ウ)

よう(良)ござりませう(十ウ)

さよふ(左様)(九ウ)

よふ(良)ござります(四ウ)

であって、「やう」1語2例と、同語形に「よう」と「よふ」の異

表記のある例があった。このように4種類の表記全てが見られる。

『拜寿仁王参』にも4種類全てがある。助動詞ヨウダに「やう」が無い点も特徴的で、

みだけやう(弥陀経)のやふな(二ウ)

御めかけ(妾)のやふな(三オ)

こも(菰)をまいた(巻)やふだ(五オ)

やせ(瘦)ますやふにとの(五オ)

ひつくりかへるやふに(八ウ)

此やふに(九オ)

これら「やふ」と、

もとのよふに(六オ)

おしく(惜)なつたよふだ(七オ)

ふくれ(膨)ますよふに(七ウ)

なるよふにして(八ウ)

このよふになり(九オ)

このよふに(九ウ)

これら「よふ」がある。助動詞ヨウダは、用例数はこれより少ないが、

あるいて(歩)みやう(八オ)

きざんで(刻)みやふ(二ウ)

きこへ(聞)よふ(六ウ)

ふれ(触)よふ(九ウ)

このように「やう」「やふ」「よふ」3種類の表記が見られた。これら以外の語は、

ようじん (用心) (三オ)

よふく (漸) (二ウ)

よふす (様子) (七オ)

であり、「よう」と「よふ」が見られる。

以上のヨーの用例を見ると、第二節・第三節に示したキョー・シヨーなどゝヨーの表記の場合と大きく異なる点のあることが分かる。ゝヨーの場合には稀であった仮名「よ」の使用がかなり多く見られるという点である。ゝヨーと同じく「や」使用の「やう」も勿論多く見られるが、「よ」を使用する「よう」「よふ」のほうが多い作品もある。このことから、ゝユーとユーの場合と同様に、「よう」「よふ」は基本的にはヨーを表す表記であったと考えられる。

一方、「(ヘ)う」は、ゝヨーのほうにのみ見られ、ヨーのほうに「えう」は見られなかった(勿論更に多くの調査をすれば「えう」の用例が見つかる可能性はあるが)。

これらの特徴から、ゝヨー・ヨーにおいても、ゝユー・ユーと同じく、書き分けの意識があったと考えられる。但し、ゝユーとユーの場合は「(ヘ)う(ふ)」対「ゆう(ふ)」という排他的な書き分けであるのに対し、ゝヨーとヨーの場合は、「やう」表記がどちらにも使用されるということがあるため、またゝユー・ユーよりも例外(ゝヨーの「(ヘ)よう(ふ)」表記)がややあるということから、表記によってどちらの音形か分かれるというものにまでは至っていない。それでも、例外は極めて少ないことから、「よう(ふ)」表記は、まずはゝヨーでなくヨーであるという常識のようなものが存

在していた可能性は高いと言える。

また、ゝヨーには「(ゝ)やふ」も無かったが、ヨーでは右に見てきたとおり「やふ」の用例が比較的多く見られる。ゝヨーに「(ゝ)やふ」が無い理由は今のところ不明とせざるを得ないが、ゝユーにも「(ゝ)ふ」が1例(当時「ふ」で書かれやすいウ音便)しかなかったことを考え合わせると、拗長音ゝユー・ゝヨーには「(ゝ)ふ」は書かれにくいことが分かる。対してユー・ヨーではどちらも「(ゝ)ふ」が多く使用されている。

六

今回の調査・検討により、まずウ列拗長音については、「(ヘ)う」はゝユー、「ゆう(ふ)」はユーの表記であったことが分かった。従って、

ジュー(十)「従」「重」等——「じう」「ちう」

ジュー(自由)

という書き分けが可能になっていた。

オ列拗長音については、右のウ列拗長音ほどは単純でなく、「やう」がゝヨーの表記にもヨーの表記にも用いられるという点などがあるが、仮名「よ」を使用する表記は基本的にはヨーを表すという特徴を見出すことができた。

ゝユー・ゝヨーの表記に「(ゝ)ゆう」「(ゝ)よう」が稀である理由は何かという疑問は、右のような特徴から解くことができる。当時、「ゆう」「よう」は、ゝユー・ゝヨーではなく、まずはユー・ヨーの

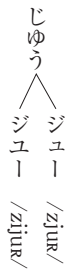
表記であったということである。そのため、 シユ ・ シヨ の表記には、(仮名「ゆ」・「よ」使用の「 シユウ 」「 シユフ 」・「 シヨウ 」「 シヨフ 」は避けられ)「 エイ 」・「 エ 」や「 エウ 」(二部の語には「 エ 」・「 フ 」が選択されたということである。

オ列拗長音の場合、「 けう (ふ)」「 せう (ふ)」「 てう (ふ)」などの「 エ 」・「 フ 」のほうは、 シヨ のみ表示 シヨ を表示し得ない(「 えう (ふ)」のみは表示し得るが、既に見たとおり、この例は無かった)ので、 シヨ を明示できる表記である。しかし勿論これのみを用いるということにはなっていない。

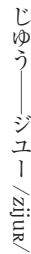
一方の「 エイ 」や「 エウ 」のほうは、 シヨ と ヨ の両方を表示し得る。すなわち「 きやう 」「 しやう 」「 ひやう 」「 りやう 」などは、 キヨ と キョ 、 シヨウ と シヨ 、 ヒヨ と ヒョ 、 リヨ と リョ の、両方の可能性がある。この点は、 シユ と ユ が書き分けられたのに比べ(現代の感覚からすれば)劣るとも言える。ただ、サ変動詞+助動詞ウのような、 シヨ も シヨ もあり得たかという場合は、どちらも表示し得る便利な表記であったと見ることもできよう(現代仮名遣いの、例えば漢字音「 けい 」等の表記が、同一語で ケ と ケイ 両方の発音があり得るものを、別表記にせず済むというのに似ているか)。この場合、 シヨ であることを特に明示したい場合は、「よしにせう」と「 エ 」・「 フ 」表記にすればよく、 シヨ は「なんぎをしよふか」(『江戸生艶氣樺燐』四才)と書ける(但しこちらは シヨ もあり得るか)。

ところで、ウ列拗長音の表記に、今回見出されたような書き分け

がなかったとしたら、例えば「 じゆう 」という文字列は、

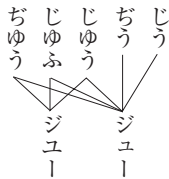


という対応になる。屋名池(二〇一一)の「二対多」の対応、「多読性表記」となり、ヨミが一つに定まらない。この類を樺島(一九七九)では「A型」(二つの文字列が複数の音列に対応する型とする。しかし調査の結果、実態は基本的には、

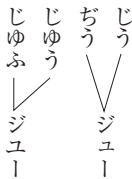


であった。

既に見た シユ と ジユ の表記として用いられていたものを並べて、書き分けがなかった場合の、文字列と音列との関係を示すと、



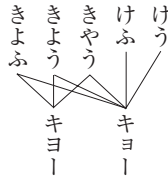
のようになる。これは、「多対多」の「多読性」であるが、樺島(一九七九)のN型で、歴史的仮名遣いには比較的良好に見られる型である。しかし実際には、



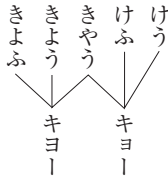
ちゆう——ジュー

という、樺島（一九七九）のV型になっていた。多表記性表記ではあるが「ヨミが一つに」定まるような工夫が自然に生じていたと考えられる。

オ列拗長音のほうは、既に見てきたとおり、右のような書き分けにはいたっていないが例えばキョー・キョーを表す文字列として用いられた可能性あるものを同じように示してみると、書き分けがなかったとしたら、



というN型になるが、実際には、



であって、同じN型でも単純化されたものになっていた。

以上のように、「多対多」にならないようにする、完全ではないが「多対一」になるようにする、基本的にはA型・N型を避けV型にしようとする志向が、確実にあったと見られる。

江戸語文献の表記が、多表記性表記であったことは大変注目される点であるが、ここまで見てきたことから、表音表記としても極めて注目すべき点があることがよく分かった。屋名池（二〇一一）が「立派な表音表記」であると主張した、その特徴の一つが、今回改めて確認できた。

多表記性表記システムで書かれたものを読むには、「優先して読まれる、特定の読みを有する文字列」の識別・特定が必要で、それに役立つものとして、連綿が指摘されている^⑩。この点については、更に平仮名の異体の用い方も関わっていると考えられる。例えば特定文字列「しやう」には、語頭に用いられるという特徴が知られている、「志」を字源とする異体の使用が目立つ。同様に「りやう」には「里」を字源とする異体が比較的多い。特定文字列が意識されていたことの証左と見られる。また改行も関わると言えよう。

なお、最初に掲げた想定される多くのオ列拗長音表記のうち、実際に用いられたのは基本的には「エイやう」と「エウ」であるという、限定が見られた。拗長音でない長音には用いられることのある「くお」「くほ」「くを」のみならず何故か「エイやふ」も用いられない^⑪。V型の上の仮名表記の種類には限度がありそうである。一方で「やふ」はヨーには用いられ、ヨーには「よふ」もあり、またユーには「ゆう」だけでなく「ゆふ」も用いられる等、「二対一」（I型と呼べるか）にはならず、V型であろうとする、多表記性への志向も窺われる。今回の検討で、表音表記として極めて注目すべき傾向を見出すことができたが、多表記であろうとする点にも注目

できると言える。

本稿は二〇一八年度成蹊大学教員研修の成果の一部である。

注1

黄表紙は次の資料に拠って調査を行った。なお、語の漢字表記は、以下の資料に注釈等のない場合は、日本古典文学大系59『黄表紙 洒落本集』（水野稔校注）、日本古典文学全集46『黄表紙 川柳 狂歌』（浜田義一郎校注）、新日本古典文学大系83『草双紙集』（宇田敏彦校注）、新編日本古典文学全集79『黄表紙 川柳 狂歌』（棚橋正博校注）、現代教養文庫『江戸の戯作絵本』などに従った。

- ・恋川春町『金々先生栄花夢』—複製日本古典文学館（日本古典文学刊行会）
- ・恋川春町『悦鼠貞蝦夷押領』—稀書複製会叢書（米山堂）
- ・朋誠堂喜三三『見徳一炊夢』—『黄表紙 朋誠堂喜三三集 復刻版』（フジミ書房）
- ・市場通笑『御代之御宝』—名著文庫『赤本・黒本・青本 前編』（富山房）
- ・山東京伝『米饅頭始』—国立国会図書館デジタルコレクション
- ・山東京伝『江戸生艶気權焼』—稀書複製会叢書（米山堂）
- ・山東京伝『八被般若角文字』—山本陽史編『シリーズ江戸戯作 山東京伝』（桜楓社）
- ・山東京伝『仮多手綱忠臣鞍』—林美一校訂『座敷芸忠臣蔵』江戸戯作文庫（河出書房新社）
- ・竹杖為軽『従夫以来記』—稀書複製会叢書（米山堂）
- ・四方山人『頭てん天口有』—和田博通編『蜀山人黄表紙集』（古典文庫）
- ・芝全交『大悲千祿本』—国立国会図書館デジタルコレクション
- ・芝全交『茶歌舞伎茶目傘』—同右
- ・芝全交『拜寿仁王参』—寛政元年板本

・唐来参和『頼光邪魔人』—鈴木俊幸編『シリーズ江戸戯作 唐来参和』（桜楓社）

・唐来参和『通町御江戸鼻筋』—同右

2 『金々先生栄花夢』には、助詞「の」「お」表記が、示した例以外にも幾つか見られ、久保田（一九九八）で検討を行ったが、みな行末（一）例は直後に絵の端が挟まる箇所にある。ここに示した他の作品の例も、「にわ」「ただし」「には」「もある」や「おぞ」に限られるなど、ある程度配慮の感じられる使用がなされていると言えらる。

3 下に示される仮名を使用する「お・ほ・を」は、「う・ふ」がEではなくOをを表すのとは異なり、そのままOをを表すので、特にCの表記を増やす必要はない（「お・ほ・を」はAのほうでOをにまとめられている）のではあるが、オ列長音の表記の例として様々なものがあり得たことを示すために、7種類を並べておく。（なお、力行以下のコー（kor）、ソー（so）などとは異なり、ア行オー（o）の場合は、『米饅頭始』の「わうくわん」（往還）（九オ）、『悦鼠貞蝦夷押領』の「大わう」（王）（七ウ）のように（あ列の仮名）に「あ」のほかに「わ」があり、『通町御江戸鼻筋』の「ゆをふ」（結）（五オ）や『拜寿仁王参』の「いをふ」（言）（六オ）のように（お列の仮名）に当然「を」もあり、また『江戸生艶気權焼』の「はやく（早）しまわを」（仕舞）（十ウ）のように「わ+を」等があり得、更に『金々先生栄花夢』「お、かた」（二オ）や『悦鼠貞蝦夷押領』「お、せ付られ」お、せわたされ」（九オ）や『拜寿仁王参』「お、せ付らる、」（三オ）などの踊り字表記がある等の点を考慮すると、「お」の表記として「あう」「あふ」「わう」「わふ」「わお」「わを」「おう」「おふ」「おお」「お、」「おほ」「おを」「をほ」「をを」「を、」という16種類もの表記が想定される。）

4 更に、鈴木（二〇一六）では、「京伝自身が「きやうでん」と自覚して書いていると認められる」「ただ「女房」に関しては『化物和本草』に「にやうぼう」ともあるが「にやうぼう」の例も、「二まじっており、「よ」の数少ない例かと思われる」「京伝に限らず、当時の他の文献でも言えるようで、例えば「饅頭」は（私が目にしたのは）みな「まんち

う」と表記し「まんぢゅう」の例は今の所未見である。この点については今後の課題としておく」などの点が述べられる。

5 「ユウ」「ユウ」ではなく「ユ」の場合、「いう」「いふ」「ゆう」「ゆふ」の4種で、(イ列の仮名) + 「ゆう」・「ゆふ」はない。

6 矢野(一九九二)にも、形容詞連用形ウ音便は「ふ」表記のほうが多い点が指摘されている。なお、ハ行四段動詞連用形のウ音便も当時は殆ど「ふ」で書かれていたことが、小松(一九八九)などからも分かる。

7 屋名池(二〇〇一)では「別の機会に改めてくわしく論じる予定」とし、少だけ分析が示されているが、特定文字列と連綿との関係は大変興味深い課題である。久保田(一九九八)で「金々先生栄華夢」の僅かな部分のみを示しただけであるが、連綿と意味のまとまりとの関係について少し触れたことがあるが、意味の切れ目という観点ではなく、「特定のヨミを有する文字列」と連綿との関係を見ると、例外かと思われる現象が、解決できる場合が増えると思われる。例えば(ここでは、連綿による連綿の無い箇所を空白、改行箇所を/としておく)『従夫以来記』の「しんせ/ませう」(六オ、『拜寿仁王参』の「ほるだ/ろふ」)(二オ・「はやかろう」(四ウ)、「いつたろふ」(五ウ)等を見ると、現代の感覚ではまとまる「ませ」「だろ」「はやかろ」「たろ」ではなく、「せう」「ろう」「ろふ」というまとまりが優先されたことが窺える。「せう」でない拗音について(屋名池(二〇〇一)では「近世通行仮名表記」に限るものではない)拗音などは除かれているが、久保田(一九九八)において、シの平仮名の語頭「志」(漢字「志」を字源とする仮名を取り敢えずここでは漢字の形で示しておく)に例外があるとして挙げた、「う志やアがる」「足志や大丈夫」「這入ま志よ」「だか志よ」「おつ志やれば」は、表記要素頭に位置しているのと見れば例外ではなくなる。

9 改行については、矢野(二〇〇一)によって語の切れ目で行移りを行うのが原則である点が指摘されている。その例外について特定文字列を単位として見ることも有益かと思われる。『見徳一炊夢』の「たべま/せう」(六オ)など。

10 江戸語の仮名遣いの調査で、基本的には字音語は「う」で動詞活用語尾は「ふ」である点が指摘されているが、この点と関係あるか。但し「ユ」・「ヨ」のほうには字音語でも「ふ」が用いられるは示したとおりである。

参考文献

- 樺島忠夫(一九七九)『日本の文字——表記体系を考える——』岩波新書(岩波書店)
- 久保田篤(一九九七)『浮世風呂』の平仮名の用字法』(『成陰国文』第三十号)
- 久保田篤(一九九八)『金々先生栄華夢』の文字の用法について』(『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院)
- 小松寿雄(一九八五)『江戸時代の国語 江戸語』(東京堂出版)
- 小松寿雄(一九八六)『江戸語の仮名遣小考』(『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院)
- 鈴木雅子(二〇一六)『山東京伝 善玉悪玉心学早染草 本文と総索引』(港の人)
- 屋名池誠(二〇〇一)『近世通行仮名表記』——「濫れた表記」の宛を雪ぐ』(金澤裕之・矢島正浩編『近世語研究のパス・ブレイク』笠間書院)
- 矢野準(一九九二)『黄表紙に於ける表記法』——一九自画作に於ける仮名遣い』——(『国語文字史の研究 一』和泉書院)
- 矢野準(一九九七)『黄表紙類(草稿本・整版本)』の表記——京伝黄表紙三種を中心に——(『香椎掲』四二)
- 矢野準(二〇〇一)『草双紙の行』——京伝黄表紙三種を中心に——(『追野虔徳編』筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念論文集)

(くばた・あつし 本学教授)